ボランティアに
参加して下さっている方へ
グループ“わ”からのお願い

くれぐれも体調には留意して無理をしないでください。そして、少しでも異常を感じられたら、直ちに関係先に連絡して相談してください。

あなたの存在こそが、グループ わの存在です。

もうひとつのお願い

ボランティア先では、依頼主の希望に沿って活動してください。依頼主の希望以上の事は決してしないでください。

依頼先には、依頼先の中での決まりごとがあります。ボランティアをする場合は、依頼先の希望以上の善意は、かえって迷惑となる場合もありますので、言われたことだけをするように心得ましょう。

ボランティアの心

ＫＳＣのカレッジ情報誌に「ボランティアの心」と題したコラム設けることになり、長年ボランティア活動を続けている わ の会員に、ボランティアの楽しさ・しんどさ・大事こと・心構えなど、エピソードや体験を交えながらの、執筆・寄稿の依頼がありました。

本部で人選の上お願いして快く引き受けていただいて、第１回５月号宮城智子さん（音 2)、第２回６月号松本恒司さん（生 7)、が掲載されましたので、紹介いたします。

阪神大震災がきっかけに
音文２期　宮城 智子

私がボランティアを始めたきっかけは、阪神大震災でした。永年世話を続けた姑を見送った後、落ち込んでいたこともあって、何か社会へお返しが出来れば、という思いが強かった頃です。

早速、音楽好きの学友たちに呼びかけたところ、たちまち十数人が参加してくれ、キーボード・琴・尺八・三味線など、さまざまな楽器を持ち寄って歌と演奏の練習を始めました。3月頃から、あちこちの高齢者施設へ車5～6台に分乗して出かけ、慰問活動にのめりこみました。「音楽がこんなにも人を元気にさせるものなのか」。そんな反応がうれしく、授業再会までの9ヶ月間、とても充実した毎日でした。「あの頃は本当に楽しかったね」。仲間と会えば、今も思い出話が尽きません。私自身も、この活動を通じてすっかり元気を取り戻し、ボランティアに目覚めたといえるでしょう。

卒業後も、「わ」のお世話や復興住宅訪問、外出介助など、数多くの活動で多忙な日々を過ごしています。気の合った仲間と施設を訪れて、一緒に音楽遊びや手芸をして過ごすひと時が、何よりの楽しみです。

ボランティアは、いまや私の元気の源。私も 78 歳になり、いつまで生かされるのか判りませんが、お世話になるより、お世話する方が幸せですよね。私の体験からいえば、ボランティア活動は、仲間づくりが出来たり、相手（利用者）から元気をもらったり、いいことが一杯あります。

でも、けっして無理をしないこと。体調が悪い時など断る勇気を持つことが、長続きのコツです。〈活動するときは笑顔で〉。それでこそ、相手と心の交流もできるのです。

ボランティア活動の旬
生環７期　松本 恒司

ボランティアという言葉が喧伝されるようになったのはいつの頃だったのか？あの阪神大震災を契機として広がったのではないだろうか。私も当時、長田区住民の一人で、住居も倒壊した。その時全国から集まったボランティアたち、日頃疎遠だと思っていた企業の炊き出しなど、忘れることはできない。

私達の年代、幼時の遊びのステージは、おおむね戸外だった。悪童たちと交ざりあい、生き物や植物を見、手に触れて、おぼろげながら自然の仕組みを感じ取ったものだ。

私はこうした幼児体験が将来のボランティアの基礎になると信じている。よき時代、家族制度があって、父母がいて、兄弟がいるならば、子どもたちは否応なしに家族の温かみを享受するだろうし、近隣によき付き合いがあれば、社会のルールを肯定するだろう。

いま、こうした家族構成や近隣と言うミニ社会はすっかり変わってしまった。将来のボランティアはどのような形になってゆくのだろうか。現在、大学生を中心として、多くの若者がボランティアに励んでいる。これは歓迎できることだが、反面、卒業後も定職につかず、ボランティアが生きがいと、親の庇護をよすがとしている若者が増えている。我々の幼時体験とは違う生育を経た今の若者のボランティアは、いくらか危険を孕んでいる。私たちは戦後の飢えの時代から、高度成長期へ、多くは自我を封じ込んで家族を支え、社会に従ってきた。いま、そうしたしがらみからも開放され、封印されていた豊かな幼時体験が花開くときだ。

ボランティアの旬はまさにこの時である。その意味で神戸ＳＣで学ぶなどは、素晴らしいチャンスだ。けれども、ボランティアをするにはいくらか資格がいりそうだ。一つは健康、もう一つはゆとりである。いま、私は自然環境についてボランティアらしきものをしているが、ボランティアは楽しくなければならない。おのおの方、くれぐれもご無理なさらぬよう、肩張らず息長くやってまいりましょう。

（なお松本恒司さんは、投稿された後5月6日に心不全で急逝されました。この一文が遺稿となりました。謹んでお悔やみ申し上げます。）